

# 「 さ さ え 」

2011年 1月発行 情報誌 第34号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所:福岡県田川市伊田4395(福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail [npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp](mailto:npo-fukusiyougunet@sage.ocn.ne.jp)

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工業(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします

床ずれ防止ハイブリッドエアマットP・Wave



介護保険貸与対象商品

本製品は福岡県産炭地域  
振興センターの助成を受け  
て産学官で共同開発した  
商品です。

特長

床ずれが一番発生しやすい腰周り部分だけが膨縮するエアマットタイプ。  
部分的なエアマットなので浮遊感が少なく寝心地がとてもよい。



特定非営利活動法人  
**NPO福祉用具ネット**

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育んでいきたい…」

## 医療と福祉の支え・ベートルを訪ねて

NPO 福祉用具ネット理事長 豊田謙二(熊本学園大学教授)

「ベートル(Bethel)」は、フランクフルト空港からほぼ北へ直進して約300kmの町ビーレフェルト市内にある。正確には、それは「ボーデルシュヴィング基金ベートル」と表される。その名称は、第二代施設長であるフリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィングに由来する。「フォン」は貴族の称号、彼は農民の悲惨な生活に触れつつ、貴族の家を出て牧師になる。

その時の教訓、「施しよりも仕事」、彼はその言葉を胸に刻むが、それが今日のベートルの理念として引き継がれてきた。では、ベートルとは何か。ベートルは、ドイツの5地区に、障害のある人、支援を必要とする人のための施設を有し、総計約2,000人の入所定員を確保する。そのなかには、ホームレスの人や若者も含まれている。在宅支援者は約2,500人である。その支援分野は、救急病院、障害のある人の支援、精神疾患のある人の支援、あるいはホスピスなど多彩である。2009年度では約15万人の人が利用し、1万5,000人のスタッフを抱える。

その組織には、てんかん症の人への支援がある。ベートルはこの分野から立ち上がった。1867年、ビーレフェルト市長、牧師フリードリヒ・ジモンら3名がてんかん症の患者のための病院と住居の建設を計画した。「ベートル」とは聖書の「神の家」を意味する。ボーデルシュヴィングは就任後、現在のベートルの基礎を創った。住宅貯蓄金庫:だれにとっても「わが家」が必要で、障害のある人の持ち家を助成するためである。ベートル通貨の発行:ベートルで創られた製品をベートルで割安に購入する仕組みである。

障害のある人に仕事が創られる。新しくベートルを訪ねる人のために、仕事を創るので仕事の種類が増え続けている。仕事に人を合わせるのではなく、人のために仕事がある、その人の仕事創りのために2年を懸けるという。しかも、仕上がった作品は実に素敵で、驚くほどの品質の高さである。

「施しよりも仕事」、その理念が実現できていることに驚愕と感動を覚えた。私どものインタビューに応えたのは、ソーシャル・ワーカーである。彼の能力とベートルを支える誇りにソーシャル・ワークの何たるかを学んだ。本年10月29日、「ベートル」との出会いであった。

### 新年おめでとうございます。

平成14年11月1日、NPO福祉用具ネットが特定非営利活動法人として、福岡県の認証をうけてから早いもので9年目を歩いています。振り返ると、本当に財政状況の厳しい中で綱渡りのような日々でした。新しい年度を迎えるたびに「来年こそは」と夢を追いかけて頑張ってきました。事務局として事業の企画から運営のすべてを任されることの重圧から、また経済的な苦しさから逃げ出したくなることも度々でした。しかし、温かい多くの会員の皆様に支えられて今日まで頑張ることができたことを改めて実感するとともに関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。先日も有志の皆様が職員一人だけのNPO福祉用具ネットの大忘年会を企画してくれました。お忙しい中、毎年県外からも駆けつけてくれます。今年も25人の皆様が集まってくれました。みんなそれぞれの職場があり、さまざまな仲間との忘年会もあると思いますが、夏の時期から、このNPOのために会場の手配など準備をしてくれます。年に一度の夜中までの語らいはとても楽しく、益々絆が深まる交流会の場となっています。この場を借りてお礼を申し上げます。

開発品もようやく評価されはじめてきました。関わった関係者の一人としてとても嬉しく思います。これまでの一步一步の積み重ねがようやく成果として見え始めているような気がします。NPO設立の準備から10年…あっといふ間の時間だったような気がします。素敵な皆様との出会いに感謝しています。また新しい一年を迎えますが宜しく願いいたします。(事務局 大山 美智江)

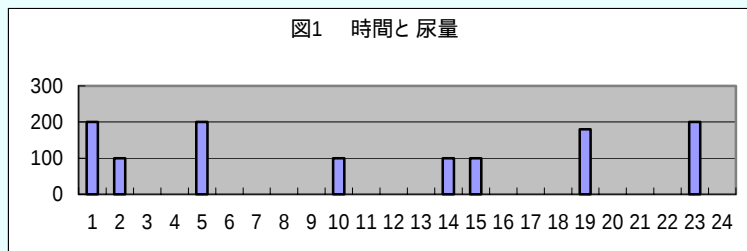
## 自動採尿システム【尿吸引ロボ ヒューマニー】を上手に使うために

### その5 排尿チャートとしての活用法

NPO福祉用具ネット 事務局 大山 美智江(看護師)



尿吸引ロボ「ヒューマニー」



心身の機能が低下し、やむを得ず排泄手段にオムツが選択されるとその後も安易に継続的にオムツ使用となる場合が多いようです。オムツを使用する前に十分なアセスメントが必要なことはいうまでもありませんが、一旦、オムツの使用となった事例についても定期的にアセスメントを行うことは大切です。

排泄時間や一回の排尿量、水分摂取との関係など排泄パターンを把握することはオムツ交換の時間を決めるだけでなく、トイレ誘導の判断にもなります。排尿量に応じたパッド用品の見直しとなり、漏れない効果的なオムツの当て方ができるようになります。失禁のパターンが分かれば治療に役立てることもできるでしょう。

これらの意義から、排尿チャート(日誌)を記録し排泄ケアの見直しを定期的実施することの意義は大きいと思います。本人にとっても介護者にとっても心身の負担となっているオムツ利用も現実には仕方がないとあきらめてしまっている場合が多いのではないのでしょうか。

そこで、今回はある介護施設で排泄ケアの見直しのために尿吸引ロボ「ヒューマニー」を活用した事例について紹介します。

(ヒューマニーは自動吸引型オムツですが尿量を把握できる福祉機器でもあります。一定期間、水分や食事摂取量とともに時間ごとにタンク内に貯まった尿量をチェックすると排尿チャートをつくることができます。)

今年8月に入所者のオムツケアが効果的にできているか見直したいというきっかけでスタートしました。一人の利用者に3日間から10日間程度、水分摂取量・食事摂取量・排便・排尿量を記載しました。排尿は1時間ごとにヒューマニーのタンクに貯留した量を記載して貯まった尿をその都度廃棄していく方法で行いました。つまり、一時間ごとに出た尿量が記載されることになります。

オムツ使用者の13人に実施しました。その内の3人は認知症のためにチューブを引っ張ったりされて

計測できませんでした。10人の排尿チャートが随時完成し、その都度、施設内の排泄委員会で検討され排泄ケアの見直しが行われました。吸収量に応じたパッドに変更され、交換時間の見直しも行われました。オムツの見直しという視点からも経済的な効果がありました。勿論、パッド交換回数が増えた事例もありました。より心地良い排泄ケアに見直された訳です。日々の見直しが一ヶ月になると一事例でも1,000円から2,000円の経済的な効果が得られたケースもありました。さらに排尿チャートを記載することで水分補給の見直しも行なわれました。それは尿量や濃縮された色を介護職員が直接確認したことが動機付けとなったからでした。

その後も入所者の身体機能の変化に伴い、ヒューマニーを活用されました。ターミナル時期における床ずれ防止や末期の排尿量の把握目的で使用した事例では一日150から300ml程度の尿量を正確に把握でき、医師との連携に役立てることができました。その結果、再び食事が摂取できる状況に回復をされました。もちろん、床ずれを発生させることもありませんでした。

今回の施設の検証で一番驚いたことは、ヒューマニーは【パッドの装着が難しい】と指摘されている中で、この施設の介護職員はとても上手に採尿パッドを装着できていることです。導入前に一時間程度、排泄委員を対象に指導しただけですが、その後全職員に使用方法が伝達されてヒューマニーを見事に活用できていることには大変驚かされました。

実は、この介護施設はテナのオムツを長年活用されています。尿量にあわせて一枚のパッドをネットパンツでフィットさせる装着方法に関してはプロという訳でした。ヒューマニーの採尿パッドのしくみを理解できれば簡単なことだったようです。ヒューマニーを上手に使えるということは、これまでのオムツに対する習慣や価値観なども影響しているのではないかと改めて感じた次第です。

\* 図1は得られた排尿チャート(1時間ごとの尿量)の一例です。

## 12 年目の福祉用具研究会に思う

田川市立病院 理学療法士

長谷川 節子 (NPO 福祉用具ネット会員)

気がつけば、理学療法士という仕事を生業にして四半世紀が過ぎました。その間、日本の医療制度は変革を続けています。従来の入院中心型医療から在宅医療へ、医療保険から介護保険へと、理学療法士の活動の場は確実に病院から地域社会へと広がってきました。

理学療法士は、ともすれば身体機能だけに目を向けがちであり、患者様・利用者様の機能障害をできる限り少なくすることを目標にしますが、そこに個人をとりまく社会的要因や環境的要因をも考慮しながら支援を行ってこそ本当の意味での「生活の再建」が可能となります。リハビリテーションの最終目標は、地域・社会で人間らしく生きる生活の再建であり、その生活を安定して継続させるために重要な要素は身体の機能のみではありません。持っている能力が同じレベルでもその人が生活する環境や状況によって生活行動にはずいぶんの変化が起こります。「生活を支援する」ということはそうした多方面からの働きかけが必要であるということ、私はこの福祉用具研究会で教えられ、気付かされ続けています。リハビリ関係者の勉強会等はいくつもの場で行われています。しかしながらこの研究会のように、実際に現場で利用者の支援を行っている多種多様な専門職が集い、疑問に思うことや新しい情報、反省や喜び、そんなさまざまな意見を交換できる会はめずらしく、貴重であり、またスキルアップにつながっています。特に、私のような、病院勤務の理学療法士にとっては、患者様の実際の生活の様子や困難さ、それをとりまく人達の連携の姿を身近に感じることでできる貴重な研究会です。

この会も世話人の大山・中藤様の多大なご尽力あってのこと。お二人の力なくして、このような研究会を 12 年も継続できることは不可能だったでしょう。福祉用具研究会と福祉用具ネットが、この田川の地に花を咲かせてくれたことを心から感謝しています。そしてこれからもよろしく御願います。そして微力ながら、お役に立ちたいと思っています。

### 京都むつき庵の訪問

11月2日、京都の排泄総合研究所「むつき庵」に行ってきました。9月にはオムツフitter 3級の研修会をむつき庵と共催させていただき受講者全員の47名の皆さんが合格をされました。事務局として研修会の開催の準備をしながら、また、講義に耳を傾けながら私も排泄ケアについて学ばせていただきました。

「たかがオムツ」ではない、漏れないオムツの当て方のポイントや身体状況にあった排泄用具の選び方について学びました。特にオムツの種類と選び方はメーカー - を問わずに実際にたくさんの種類を比較して確認できたことはとても貴重な機会でした。

オムツの種類といえば、むつき庵には各メーカーのオムツのサンプルが見事に整理されて展示されていました。オムツだけではなく、ポータブルトイレや尿器など排泄問題の解決手段となるものがたくさん展示されており、試すこともできるようになっていました。

この機会に私も困難事例のサポートをするために相談をさせていただきました。期待どおりのパッドを紹介していただきサンプルを頂いて帰りました。さすがに排泄総合研究所だなあと感じました。

排泄問題はあきらめていたり、オムツの当て方も教えてくれる場所も少ないのが現状です。たくさんあるメーカーのオムツの中から最も適したものを探すことも大変です。より適切なものが例え存在していてもユーザーに情報として届いていません。

私達のNPOにも排泄の相談が時々あります。先日も多量の下痢便の対処について相談がありました。いくつかのオムツメーカーに問い合わせをしましたが解決できませんでした。ちょうどオムツフitter研修会の件で連絡を取り合っていた「むつき庵」に相談させていただきましたところ適切な対処法と軟便対応のパッドの情報も教えていただきました。直接に相談者にも対応していただき、サンプルも送っていただきました。相談者の方からはNPOにも感謝のお礼状をいただきました。

相談できる場所として、また排泄ケア用品の情報館として「むつき庵」の存在はとても大切です。既に全国にいくつかの「ミニむつき庵」も誕生しているようですが、私達の地域にもそんな情報館があったらいいなあ~とつくづくと感じた次第です……。 (事務局 大山美智江)



## 今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」

(その24)

九州日立マクセル(株) 技師長 坂田 栄二  
(NPO福祉用具ネット理事)

その後のP・Waveは

P・Waveの「売れる商品化」に向けて、開発メンバーにも頼もしい人材が投入された。それが帰山である。先の車いす体重計の開発でも紹介したが、いつも、誰もが解決できない問題山積み商品の突破口として期待される人材である。(ご関心のある方は、ささえ31号をご覧ください。)

売れる商品に仕上げるには、たくさんの課題があるが、その中でも大きな課題は、

生産コストを下げること。

品質の信頼性を上げること。

である。

特に のコスト削減は、大山のたつての希望である。日頃から「介護保険が適用されない元気高齢者にも使って頂きたい。そのためには誰でも買える価格にして欲しい。」と、口酸っぱく言い続けていることである。

しかし、コストを下げると、 の信頼性が脅かされる恐れがある。大山はこの相(あい)反する課題を開発者にぶっつけてくる。

これを解決できるのは帰山しかいない。

ゴムの厚さを口(くち)で計る?

帰山がまず最初に手を付けたのがコストダウン。材料費の中で約半分を占めるのが、先号で紹介したウレタンゴム製のキュービックセルである。原材料費が高い上に、加工費も高い。

帰山は、松原がこっそり試作していたウレタンゴム製のセルを取り上げ、口で空気を吹き込んでみた。みるみる色が赤くなった。口を尖らせて真っ赤な顔をして、まるで「ひょっこお面」の形相である。しかしセルはわずかしか膨れない。

「松ちゃん、こりゃゴムが厚すぎるわ。もっと薄くても良いよ!」



最初の小さなウレタンゴム製セルユニット

帰山はセルを、右手でぐるぐる振り回しながら、松ちゃんこと「松原」に手渡した。厚さを計る特別な測定器を使うわけでもなく、口だけで測った(?)結果である。これがプロ開発者の勘か!

「もう少し薄い材料があるはずだよ」

帰山は、本棚からゴム材料のカタログを取り出し、パラパラとめくって、

「これがい良いんと違うか?」

と、いとも簡単に決めてしまった。

帰山のコストダウンのためのチェックは、さらに続いた。もう一度、松原からセルユニットを貰うと、

「なんでこんなに小さいんか?」

「試作やから、大きいと値段が高かったからや。」

松原は、セルユニットを取り戻すと、なでながら言い訳をした。まるでわが子のように。

「これじゃ、ユニットの間を1つずつチューブで配管しなくちゃいけんやんか。!」



6個のユニットを組み合わせたセルブロック

「簡単だよ。セルは規則正しく並んでいるから順番につないで行けば良いんだよ。」

帰山は、すでに配管して出来上がっている大型のユニットをひっくり返した。

そこには小さいユニットが縦3列、横2列の合計6個が並んでいた。そのユニット間を無数のチューブで配



ユニット間をつなぐ たくさんのチューブ

管していた。

「こりゃ、簡単じゃないよ! 1つでもチューブが外れたら、空気が漏れてしまう…」

「おまけに、チューブが背中に当たってゴツゴツするんとちゃう?(違いますか?)…」

横で事の成り行きを見守っていた大山も、思わず口を挟んだ。

これらの指摘は、信頼性にも関係してくる。

「じゃー……。1枚モノの大きいサイズのセルブロックをつくらうよ。」

大山の提案に、帰山も、

「そうすっかー(するかー;富山弁?)」

「でもね、セルは交互に膨縮するから、セルがきれいに並ばないんだよ。セルの間の導管部分が繋がらないんだよ。」

松原も行きがちり上、反論していた。

「それを、考えるのが、松ちゃんの良いところやろ！」

帰山が、松原をなだめた。

「そう簡単には行かんよ。」

松原は、紙を取り出してセルの形の四角な絵を描き始めた。

頭の軟らかい松ちゃん

次の日の朝早く、松原は帰山に、

「これで良いか？」

差し出された1枚の紙をじっと見ていた帰山は、

「出来てるやんか。」

「導管部分が難しかったよ。そこで2階建てにしたら解決したよ。」

松原の顔には、宿題を突きつけられた昨日の悲壮感無く、クイズを解いた子どものような得意顔になっていた。年齢に似合わず、実に軟らかい頭である。

「ついでに、外周の供給チューブも一体にしようか？」

もっとコストが下がるし、何にも後加工をしなくて済むやん。」

確かに、コストが下がりそうである。セルブロックの外周をぐるっと取り巻く約3mもの長いチューブが不要になる。これは大幅な削減である。帰山は、松原のメモ紙を見たときに思いついたという。

「松ちゃん！セルの見通しはついたね！来週、大阪に行ってくるわ。」

2人とも満足げであった。

業者さんから教えられる業界情報

帰山は、大阪の試作屋に出向いた。そこのおやじさんに価格の見直しを迫ったが、どうも快く回答が得られない。

話しているうちにその背景がわかってきた。どうやら大きいサイズのウレタンゴム加工が出来るのは、日本でも数社程度しかないということだ。大きいサイズの加工には、大きな加工設備がいる。ゴム加工屋の多くは中小企業が多く、膨大な投資が出来ない。このために数社に仕事が集中してしまっている。そのうえ、別のもう1社は、エアマットの競争相手の会社と組んでいる。この特殊な仕事の需給バランスを考えると、工賃は高

くなくても仕方の無いことである。

しかし帰山は、何とか良い結果を持って帰りたいと粘っている。もう何本のタバコを吸ったことか！ズボンの膝の部分にタバコの灰が沢山散らばっている。そんなことも気にせずに、タバコを吸い続けている。

大阪弁は値切りやすい？

「実は……。」

と言葉を区切って、タバコを灰皿に押し付けた後、帰山は鞆をごそごそ掻き回してから図面を取り出した。その図面こそ、松原・帰山のコストダウンのための合作図面である

「こういう風に変更したいんだけど。」

「なんや！あの小ちゃいのを作るとちゃうんかいな。あー、びっくりしたがな！ありゃー大変なんやで。成形するときにセル1個ずつに、接続ソケットをつけにゃあかんのや。人手は掛かるし、機械にはうまくからんし。あんたが言う値段じゃうちらかて儲けへんがな……。でもこれやったらいい値、出るかも知れへんで。ちょっと待ときや。」

こてこての大阪のおやっさんは、大阪弁を振りまきながら電卓を取り出して図面の上で、計算し始めた。

「良い値段出してやー。九州に戻れへんからな！」

と大阪弁まじりで帰山は、またタバコを吸い始めた。なんとなく頼もしい交渉人である。

このとき、なぜ帰山が古いタイプのセルユニットの工賃で最初からずっと交渉を続けていたかを、後日聞いてみた。

「あん時は、初めからコストダウン図面を出すと、もっと高い値段が出てくる。おやっさんに言いたいことを何度も弁解させると、それ以上言うこと無くなるんや。そんな時に、新しい図面見せたら、もう言うことあれへんから、仕方なしに安い値段を出すしかないんや。」

帰山は、おもしろがって、そう私に耳打ちした。彼は本当に交渉人なんや！。(わたしも大阪弁につられた。)

適正価格を追う

帰山が次に取り組んだのが、品質向上と信頼性アップだ。

ポンプ本体をベッドボードに引っ掛けるとポンプの振動がボードに伝わって、もっと大きな音に変わる。以前から指摘されていたが、そこまで手が回らなかった。

彼は、ゴムやスポンジメーカーから、弾力性の違う色んなサンプルを取り寄せ、引っ掛けフックの内側に張付け、試してみた。根気のいる作業である。そのような中から、ようやく1つのスポンジを見つけた。値段を聞くと、彼にとっては予想外に高い。また交渉人に早変わりである。納得のいく価格が出るまで粘っこく交渉を続ける。そんな手強い交渉人である。(次号へ続く)

## 第 12 回西日本国際福祉機器展に参加して

社会福祉法人農協共済

別府リハビリテーションセンター 言語聴覚士

小林 典子

11 月 11 日木曜日から 13 日土曜日までの 3 日間、小倉の西日本総合展示場で開催された第 12 回西日本国際福祉機器展に参加させていただきました。我々別府リハビリテーションセンターは、介護技術をテーマにしたセミナーや、リハビリテーションに活用されつつある「ロボットスーツ HAL」のご紹介、そして我がセンターについてのお話の機会をいただき、ブースでの展示も行いました。

「ロボットスーツ HAL」は皆さんもマスメディアでご覧になったことがあるかもしれません。筑波大学の山海嘉之教授を CEO として設立されたベンチャー企業、CYBERDYNE 社が研究開発を続けているロボットスーツです。今回は、医療・福祉の分野で応用するために開発された「ロボットスーツ HAL」福祉用を、CYBERDYNE 社のご協力をいただいて展示し、実際に着用した状態をお見せしながら、リハビリテーションに使用している場面の写真や使用された方のご感想などをご紹介しました。プレゼンテーションの時間以外にも、たくさんの来場者の方が「ロボットスーツ HAL」の実物を見に、そして触れにお越し下さり、ブースには常に人の山ができるという盛況ぶりでした。

「福祉用具活用セミナー & 介護セミナー」では、昨年に引き続き、PT、OT、ST が、それぞれの分野から介護の現場で役立てていただきたい技術についてのセミナーを行いました。PT・OT からは、実際にリフトやスライディングボード、電動ベッドなどを使用しての介助法を、そして ST の私からは、摂食・嚥下障がいの基本的なお話とその対処法、最近のトピックスについてお話しさせていただきました。セミナーの時間のたびに帰ってきて下さったり、何度も質問に来て下さったりする参加者の方もいらっちゃって、皆様の熱心なご様子に、こちらの熱も一段と上がりました。

中でも強く印象に残っているのが、大山さんにご紹介いただいたある女性との会話です。その方はご主人の介護をご自宅で長くなされているのですが、私の話をお聞き下さった後で、ご主人の飲み込みやことばについてご相談下さったのです。私は、もちろんご主人にはお目にかかったことがなく、女性からのお話以外には何も情報を持っておりませんので、無責任にお答えすることには憚りがありました。ですが、お話をうかがって想像できる範囲の中から申し上げたお返事に、その方は真剣にうなずいてくださいました。在宅で、ご自身にできる精一杯のことをなさろうとされる女性の姿に打たれ、私は自分たち専門職の責任をあらためて感

じました。地域にも、そしてこうした場にも、何かのきっかけや答えを求めて参加される当事者の方、ご家族の方、そして現場でお仕事をなさっている方がたくさんいらっしゃる。微々たる力ではあるけれど、己の職場以外にも、自分がお貸しできる場がある。そのことに気づかせて下さった、笑顔の美しいその女性に、今も心から感謝いたしております。

さて、出展者としての嬉しいことも大いにありましたが、一人の参加者としても、最先端の医療福祉機器に触れたり自分の専門分野と関係のある出展者の方とお話させていただいたりして、大変有意義な時間を過ごすことができました。ST は「言語聴覚士」という名の通り、ことばやきこえ、それに関係する器官の障がいをお持ちの方に対してのリハビリテーションを行います。ですから、嚥下障がいや失語症、脳血管障害や神経筋疾患によることばの話しにくさだけでなく、声や発音の障がいやことばの発達の遅れ、聴覚障がいなど、さまざまな障がいに関わります。展示会を回る中で、中途失聴やご病気の為に喉頭を摘出された方の会のブースがあることを知り、驚くとともに、ご自分たちのことをご自分たちのお力で知ってもらおうとされるご努力や勇気に心から拍手をお送りしたい気持ちになりました。

私は今回が初参加でしたが、まずは展示場の大きさに驚き、さらに会場の熱気に驚き、そして同じ医療福祉に関わる者同士の出会いと交流の温かさに感動した 3 日間でした。



セミナー 腰痛対策講座



別府リハビリテーションセンターブース

## 事務局からの報告

毎年、この時期は年度の締めくくりと新しい年度の準備時期となります。一年を振り返りながら、来年度の事業の企画、つまり生みの苦しみをすることになります。

現場のニーズや会員の皆様の期待に添えるような事業計画を立てたいと思っておりますが介護を取り巻く環境も刻々と変化しています。皆様からのご助言・アイデアなどいただけると大変助かります。よろしくお願いいたします。

冬の寒い時期は天候の都合で左右されやすい研修会は企画していません。何卒ご了承下さい。

(事務局 大山)

### 平成22年10月～12月までの事務局の動き

#### ■福祉住環境コーディネーター協会主催見学会の企画運営

10月9日 福岡県クローバープラザ

12月11日 佐賀県介護普及実習センター

#### ■平成22年度福祉用具研究会は予定どおり7回シリーズのすべてが終了しました。

今年のテーマは「車いすのシーティング」について理学療法士の井内陽三さんが中心となって新しいメンバーも増え、毎回20人以上の会員の皆様が出席して開催されました。後半は実際の事例の報告と意見交換会を行いました。有意義な情報交換の場となったようです。

来年度のテーマは「ポジショニング」について行なうことが決定しました。新しい年度のスタートに伴い、福祉用具研究会23年度の会員募集を開始します。

#### ■西日本国際福祉機器展に出展しました。

平成22年11月11日(木)～13日(土)までの3日間、西日本総合展示場新館において開催された展示会にNPO福祉用具ネットが開発支援をしている会員様企業と協力して出展しました。

NPO福祉用具ネットのブースへの出展社は以下のとおりです。

九州日立マクセル(株) ユニ・チャーム ヒューマンケア(株) (株)タイカ ミツ和金属(株) 日本PLANET INT(株) ロボフューチャー(株) 龍宮(株)

福祉SDグループ 福岡県立大学福祉用具研究会 別府リハビリテーションセンター

NPOブース内セミナーも以下のような内容で3日間連続して開催しました。

- 腰痛対策講座 介助技術と福祉用具の活用  
講師 別府リハビリテーションセンター PT・OT
- 摂食・嚥下障害の方の介護のポイント

講師 別府リハビリテーションセンター ST

- 口腔ケアの実際

講師 医療法人康和会アイ歯科柏ノ森 木村照美氏

- いつまでも美味しく食事をいただけるためには  
～介護者のための口腔ケア講座～

講師 医療法人康和会理事 歯科医師 中園洋大氏

- 床ずれ防止用具の選び方

講師 佐賀大学医学部准教授 松尾清美氏

- 新しい排泄ケアの提案 尿吸引ロボ ヒューマニーの上手な使い方について

講師 NPO福祉用具ネット 大山美智江

●「ロボットスーツHALでリハビリサポート HALの紹介」講師 別府リハビリテーションセンター PT

3日間、多くの皆様に来場していただきました。新しい床ずれ防止用具「アルファブラ ソラ」や尿吸引ロボ「ヒューマニー」や開発の試作品などをご覧頂き貴重なご意見も伺うことができました。

ブースセミナーにもたくさんの皆様が聴講してくださいました。ご来場くださいました皆様にお礼を申し上げます。

#### ■その他、NPOの事業

開発に関する受託事業として、企業から依頼で試作品のモニター検証や開発品の拡販に関する支援をしました。

### 今後の予定

- 1月8日(土) 14:45～17:30 熊本大学にてNPO福祉用具ネット関係者が公開シンポジウムを行います。

日本機械学会 第23回バイオエンジニアリング講演会

#### テーマ 「利用者視点からの福祉用具開発 -生活の「快」をサポートする-

コーディネータ: 豊田 謙二氏

(熊本学園大学 社会福祉学部・教授)

シンポジスト: 坂田 栄二氏

(九州日立マクセル株式会社 開発本部・技師長)

シンポジスト: 田中 哲也氏

(ユニ・チャームヒューマンケア株式会社・マネージャー)

シンポジスト: 大山 美智江

(特定非営利活動法人 NPO福祉用具ネット・事務局長)

シンポジウムマネジメントスタッフ: 中西 義孝氏

(熊本大学大学院 自然科学研究科))

アドバイザー: 竹上 嗣郎氏

(経済産業省 商務情報政策局医療・福祉機器産業室室長)

- 1月29日・30日 佐賀大学開催の第20回日本障害者スポーツ学会の応援をします。